古 代 口天智天皇 四弘仁時代 (三天平時代 一推古時代 空海 唐 隋 聖 一徳太子 唐初 朝鮮

<del>约平氏時代</del> 田藤原時代

中

古

(前期

后期)

純日本

足利時代 宋 元 明 初

(七)

鎌倉時

前

期

宋

(後期)

元

仇豊臣時代

近

代

徳川時代 前 期 中 期 後期

森鷗外、 後藤貞行の「美術解剖 講 義

そのことは日本固有の精神の維持に抵触しないと考えていたのであ る際などは解剖学、 識を応用して精神の開発を図るべきであり、 らこれを置くことを予定していた。 口 画 なように、 サや岡倉はこの科目を重く見て、 美術解剖」 彫刻科第一年の履習科目 岡倉らは日本の絵画、 の科目は最初の 遠近法等の学問的知識を応用すべきであって、 (毎週二時) 「東京美術学校規則」 彫刻は日進月歩著しい明治の智 岡倉の カリキュラム原案作成の段階 として登場する。 『国華』 特に、 発刊の辞に明ら 人物を題材とす に専修科の絵 フェ カン

にもこの科目の履習が義務づけられ 治二十五年の規則改正以後は彫金科、 (蒔絵科は同二十七年以後履習廃 鋳金科、 蒔絵科の 年生

> 異なっていた点が注目される。 (毎週 には西洋画科と彫刻科は第一、二年で、 鍛金科、 一時)。 次いで同二十九年七月、 西洋画科と日本画科とでは 鋳金科は第一年でこれを履習することに改 西洋画科設置等に伴う規則改 「美術解剖」 日本画科は第三年で、 の位置づ めら 正 け n 彫金 0 が た 際

の貞行の講義に関する資料は現存しないが、 解剖ではなく、 集』には白井雨山ら第一期生の時代は「美術解剖」といっても人体 を担当したが、 を請負った際に高村光雲を介して採用され、楠公像の馬の木型制作 えられる。 (後述)が残っているので、凡その内容は把握できる。 この科目の担当者についていうと、 馬の彫刻家として知られる貞行は、 貞行の馬体解剖講義のみであったとある。 「美術解剖」も担当したらしい。 最初は後藤貞行であっ のちの時期の講義筆 本校が楠公銅像製作 『雨山先 この初期 生 たと考 遺 作

る。 われる。 ったようであり、 痕 校嘱託教師としてこの講義を担当している。 は、 が始まった。陸軍軍医学校教官、 貞行の後任が森鷗外であり、 (明治二十三年) 本務の傍ら明治二十四年二月十四日から同二十八年七月まで本 左記の書簡は起用に際して岡倉が鷗外に出 そのことがきっかけとなって起用されたものと思 によれば、 それ以前から鷗外と岡倉は交際があ 馬体解剖に代わって人体解 陸軍二等軍医生、 岡倉覚三の日記 したもの 従六位 剖の 森 で 鷗 雪泥 講 あ 外

拝啓 左の日割にて御開講相成候様致度 人骨モ大学より参り候ニ付御差支無之候 尤モ専修科甲乙生の分は是 八、御都合次第

曜日の分より願度 御様子御示し被下候ハ、幸甚 迄ノ解剖講議月末頃ニ一結候間其上ニて御始め被下度 先ツ月

月曜 午後三時半より五時半 二時間

(教員助手等にて美術解剖聴講志望者の分)

水曜 午下三時半より四時半 一時間

(専修科一年生甲乙)

金曜 午下三時半より四時半 一時間

(同上)

右得御意候

草々頓首

鷗外先生 4

十六日

覚三

(森鷗外あて岡倉覚三書簡。文京区立鷗外記念本郷図書館蔵

講義が続行中であったことを指すのであろう。る。なお、「是迄ノ解剖講義」云々の語句は恐らく当時後藤貞行のる点は、鷗外に寄せる期待の大きさを示しているかのごと く で あ文中、生徒のみならず教員、助手等のための講義をも要請してい

# 鷗外の「美術解剖」講義

(四六判三百四十八頁。洋綴クロース装)が使用されている。し か し、に収録されており、そこでは文京区立鷗外記念本郷図書 館 所 蔵 本る。 これは既に岩波書店版『鷗外全集』第二十九巻(昭和四十九年)の講義録をもとにして編んだものとされている『芸用解体学』がある諸義に関する資料としては、明治三十年前後に鷗外自ら本校で該講義に関する資料としては、明治三十年前後に鷗外自ら本校で

ども参考にしたことが考えられる。 哲の『骨経』、丹波元胤の『体雅』、 粉本に用いているが、 によれば、J. Kollman, Plastische Anatomie. Leipzig, 1886 子の内容は専ら人体のみに関するもので、 はなく、 ものと同じだが、こちらは和綴クロース(茶色無地)装である。 今編者の手もとにあるのは原安民旧蔵本で、 1882」が上記岩波版全集では欠落している。 Stillman, The horse in motion, James R. Osgood and Co. 本の背には「藝用解體斈」と墨で書かれている。この小冊 ほかに中国の沈形の『釈骨』、日本の石 山脇東洋の『藏志』、『非藏志』な なお、 序論にあたる部分の記述 本書の最後の一行「J. D. 判とページ数は上記 坂宗

社 久米桂一郎同選 学」(明治二十四年四月『国民之友』百十一号) 創始者であったと言えよう。なお、本校における科目名は「美術解 二十五年には田口和美、 招かれて「美術応用解剖学」と題する講演を行っており、また、 では実際に猿の解剖などが行われた。次いでこの領域に手を染め から玉越興平を招いて週二回美術のための解剖学講義を行い、 剖」であったが、鷗外自身は「芸用解体学」ないし「造 行されている。 人に解剖学の泰斗田口和美がいる。 ォンタネージの後任として来日したサン・ジョヴァンニが東京大学 つに至ったのは鷗外においてであって、その意味で鷗外こそ斯学の 日本における美術解剖学講義は工部美術学校で始まっている。 に至って名称にやや変化が見られるものの、 しかし、それが一つの学問領域としての体系性を持 『芸用解剖学・骨論之部』 田口茂一郎撰 彼は明治二十年に東京彫工会に 『美術応用解剖学・全』が の名称を用いた。 (明治三十六年二月、 美術解剖学」と 形 画報 同 体 刊

, う名 が 般 K 用 い 5 n る 0 は まだ 0 5 とで あ

り上げ はミ をもって なる部分が多い 才 『芸用 ケ 5 ラ 「ボ 不足 解体学 n ル 7 ジ ネ ル 1, 工 を ゲ エ る。 口 補 工 ゼ B つ 0 0 内容 ij た。 0 、体各部 2 力士」、 ルクレ は左記 1 項 ~ 目 の名 ン スし、 (原文の 「アガジア のとお ス 称や区 0 作等 おりである 見出 ルベ 分法は 々. ス デ 0 語句 るが、 美 工 角 現 術 「觝者」、 ル 作品 を列記 行 0 随所 0 残 医 から 軀、 例 K 用 2 語と異 あ 才 ラ て採 ~ 才 る

n

#### 芸用 解 佐学

0 節 皮 論 0 襞 皮 連 〔芸用 毛髪 皮 関節 0 色 解 0 体 男 通 学 女 性 概 0 論 関 皮 節 皮 0 教 形 0 ^ 髪だ なたなまた 節に 皮 沿革 0 窪 蝶 番 及 溝 節 骨 節 組 骨 0 立 0 わ 節 通 性

肉

部 顔

[本論]

肢 動 根 0 総 貝 胸 中手骨 一般骨 骨 胸 頭 一顎骨 椎 手 肋 腿 上がみのうで 字 ż 0 頭 骨と 胸廓 鼻 骨 0 指 椎 骨 指 骨 骨 0 髖 膝 との 肩 交 手と -字骨 節 骨 胸 顴 會 0 間 節 0 指との 足 0 運 傾 脊柱 聠 前膊のりで 下 指 0 動 骨 接 節 顎 運 死 骨ね 面 足が骨 尺 脊柱 H 動 人 0 根の 肢 下 盤 額骨で 手 輻 胸 顎 餘 0 0 中 足 か の 完 の節 論 節 節 肘 74 ٤ のあ形 下 肢 紐 手 0 頂 肢 0 節 骨 0 屈 脊柱 骨 手 胴 肢 枕 0 0 尺 骨 鑰 骨 0

肉

眼とそのな 「(くちのめぐり) 手 後 色 肉 腿内諸 肉餘 Ę 下 前 腹 胸 0 0 脚 膊 膊 肉 肉 槓で通 後 伸 論 肉 結ずびか 関かり と 背 肉 肉 側 胸 紐 を 臂 上 肢 腱で 群 0 肉 骨 な 環分し 肉 目 0 0 膊 肉 のう 経出る 膕 腿 廻 浅 喉 目 肉 た 形ち 前 0 後囲 尺澤 胸廓 及十字 肉 背 頭 肉 血 0 外耳 外 足 管 肉 及 肉 审 鼻 廻 肉 諸 F: 腹 肉 肉 手肉 一膊 ŋ نے 下 線 紐 紐 肉 深 0 足 肢 後 背 腹 耳 頭 形 省 下 壁肉 蓋と 肉 頭 肉 肉 舌 臉 脚 栂 骨 肉 辺 肉 紐 肉 球 肉 情 0 肉 髖 腋 四 0 ح 0 蹠 肉 肉 窩 肢 動 皮 肉 頭 肉 性 前 頸 檘 ٤ 肉 群 0 腹 蓋 肉及 脚 前 肉 肉 視 下 肉 脚及足 前 腿 季 膊 眉 顎 肉 路 肉 肉 指 肉 眠 0 面 束 0 肢 球 腹 頸 目 臉 肉 肉 0 角 (まぶた) 2 肉 を 肉 前 0 肉 肉 0 皮 死 紐 廻 腿 群 膊 肉 面 な 辺の肉とり起より起 肉餘 MI 脚 # 頸 目 目 前 直 L た 諸 側 掌 管 諸 側 腹 前 0 る 肉 肉 裂 肉 肉 0 肩 側

脚 肉 餘 論

児 女 身 身 0 権衡 女 骨 児身 4 顱 所 々 女 0 胸 特 徴 女 腹 児 0 女 諸 髖 組 織 女 脚

衡

0

人身 然 移 運 凝 面 硬 地 な 運 0 間 立 平 動 権 走 行くこと 位 0 両 0 を求む 種 脚 餘 八身の 同 類 論 人の身長 時 平位 行 行 0 坐 る 位 感 走 0 谏 0 置 行と走と 試 力 立 人身の 人面 0 験 時 種 走 軀幹 重 類 点 走 等立時 時 0 牽 平位 擔 下 運 行 肢 動 0 始 0 洇 0 0 支撑 運 行 点 諸 飛 動 0 節 行 個 2 人的 重 他 走 時 時 0 下 運 軀 変 肢 寸 蒔 化 幹 0 運 自 0

紙には 授、 崎康彦・吉田千鶴子共著。 述は第六講 てすれば「皮」の項の末尾から始まり「目とその球と」で終って あるが現存しない。 もわかるとおり、 際に受講したのは明治二十四年度であったと考えられる。 鉛筆ないし毛筆で清書されている。 科第二年生、 見されているので解説を補足しておく必要がある。 ではさらにもう一冊のノート、 の内容と順序がおよそ一致することが確かめられているが、 序論に始まり骨の部の最後のあたりで中断している。) と対比させて両者 術解剖学、 も詳しい解説がなされている。 頭骨の交會」) 講 ノートの場合と同様に清書の時点を意味するものであって、 処々に講義の数次や日付が記入されており、 第十講 この点については既に (「脊柱」 軍二等軍医正、 「明治廿五年六月、 この『芸用解体学』と実際の講義との対比の問 医学博士森林太郎先生口述」(明治二十五年度講義の筆記。 (「毛髪」の末尾まで) (歯)~ 菅紀一 5 第八講 「脊柱の運動」) ほ 1 かに 郎筆記」と記されている。 「胴の骨」) (「面骨」~「頂骨」) 從六位、 昭和五十二年三月日本文教出版K. K.) に 1 「美術解剖学一」のノートがあったはずで 東京美術學校囑託教員、 の記述は上記 『東京美術学校の歴史』 第十三講 菅紀一 すなわち、 森鷗外先生口授、 第十一 から始まり第七 表紙の年 一郎筆記 講 (「胸骨」~「胸廓」) 第 『芸用解体学』の (「脊椎」~「十字骨」) 菅原大三郎の 九講 記 「美術解剖学二」が発 中味は文章、 は既述 講 それによると、 美術學校繪画 (「枕骨」~「下顎の 菅のノートの表 (本論 陸軍軍医學校教 (桑原實監修、 ノー 一泰 題 第十四講 「首骨」~ 標題 項目を以 現時点 で 図とも 茜 1 お 第十 あ 心から [美術 [專修 いて 「美 記 実 磯 る

学』の全体には及ばなかったと判断できる。

十八日、 までに 十六講 中途~ 十六講 る。 5 ことは不可能であろうから、 以後数回続行したかとも考えられるが、 「胸廓」 「口圍の肉」) 最後の日付からみて第二十六講が最終講であったか、 「肉束の肉紐より起れる」) 第二十四 講 『芸用解体学』 (六月八日、 「肉の通性」 の中途~ -この間区分不明瞭 第二十五講 「胸の運動」) 5 「面肉餘論」~「眼とその球と」)の順に進められて の「眼の外廻り」以下 「肉の性」) (六月一日、 第十 この二十四年度 第一 第二十一講 Ŧî. 十三 講 「口圍の肉」の中途~末尾) 孰れにせよ年度末 (「死人の胸」~ 一講 (五月二十五日 (五月四日、 「力原」までを講ずる 0 第二十 講 義 は 二講 「貝殻骨」) 肉 『芸用 「肉間紐 あるい (六月末) (四月二 性

3 る。 る。 ある。の一部を写したもので、 書に就て之を改訂し更に新製の數圖を加へ畫工近澤勝見氏之を描寫せり」 大學校教授邊蘆華留博士の撰擇せしものに據ると雖とも碩學阿兒敏 ているが、これは前出 しかし、その反面、 にしたものであろう。 胸の運動」におけるヴィ 菅のノートの内容、 なお、 相異点を挙げれば前者は記述が幾分簡略であり、 1 トの中には全身の骨格、 後者と違って図がところどころに記され 順序は 『美術應用解剖學』 ンケルマン略伝などは省略されている。 『芸用解体学』 講義とは別個に菅が自分の勉強の 筋肉の図三葉が挟み込まれ の附図 のそれとほ (凡例に 例えば後者の ぼ 獨國伯 対 博 7 応 士:

# 後藤貞行の「美術解剖」講義

鷗外の講義は明治二十七年八月の日清戦争勃発とともに彼が軍馬

る唯 失われたらしく、 われるユニークなものである。 掬汀著「後藤貞行の伝」『中央美術』第二十二号。 治二十九年一月編)、 手記本「人体解剖・骨学・筋学」「馬体・骨学・筋学・外貌」 部・人体之部、 期間は久米の就任までの一年弱の間にすぎなかったと考えられる。 作担当として嘱託を命ぜられた。 後藤貞行が「美術解剖」「彫造手訣」授業および授業用解剖模型製 八年度に限定される。 正三郎 が、その間、 六日にいわゆる美術学校騒動に関連して辞職するまで在職している として戦地へ赴いたため中止された。彼は翌二十八年十月に帰国 〈行の「美術解剖」講義の内容はこれまで不明であったが、山本 その約三ヶ月前の七月九日付で本校嘱託を解かれ、 授業嘱託となっているので、貞行が「美術解剖」を担当した の手掛りとなっている。 (明治三十年彫金科卒)の筆記ノート「美 術 二十九年四月十七日には久米桂一郎が「美術解剖」「考 後藤教授」の発見によって概要が判明した。 現在、 「彫造手訣」等の著述を残したというが この山本正三郎のノートが貞行の学識を知 講義の時期は上述のように明治二十 内容は馬の彫刻家としての本領が窺 以後、 貞行は明治三十一年四月十 昭和十年五月)、 解剖学、馬体之 同日付で 。貞行は 戦災で 田田

明治二十八年度後藤貞行「美術解剖」講義、馬体の部

#### 一、骨格

清関節)の構造 骨格の概念、骨の構造、関節(可動関節、不動関節、混

(絵画、彫刻における人物の輪廓線の基礎となるのは骨格)

いる)。 変化する実状を熟知する必要があるということなども述べて変化する実状を熟知する必要があるということなども述べて変化する実状を熟知する必要があるということなども述べている)。

#### 本論

### a、軀幹骨

頭骨 骨)、顔面不対骨 小上顎骨、 顱頂骨、 鼻上骨、 前頭骨、 (鋤骨、 涙骨, 顳顬骨、 下顎骨)、 顴骨、 顔面対骨 口蓋骨、 歯 (大上顎骨、 甲介

有相骨

胸廓骨 胸骨、肋骨椎骨 頸椎、脊椎、腰椎、鷹骨、尾椎

b、四肢骨

嘴頂)、前足骨(腕骨、腕豆骨、腕前骨各部、趾骨各部)前肢骨 肩胛骨、膊骨、前膊骨(膊骨、橈骨、尺骨、鶯

骨、腓骨、膝蓋骨、後足骨(跗骨、跗前骨各部、趾骨)後肢骨 - 臗骨(膓骨、座骨、耻骨)、股骨または大腿骨、脛

### 二、筋学

本論 筋学の概念、横紋筋と平滑筋、隨意筋と不隨意筋

a、頭の諸筋、鼻梁の諸筋、顳顬顎の諸筋

帯、乳頭脾筋、胸骨顎骨筋等脊柱の諸筋、脾上筋、僧帽筋、肩胛角筋、菱形筋、

頸

靱

b

481 第3節 学科授業

c 背腰の諸筋、 大背筋、

e d 肋部の諸筋 胸腹の諸筋、 動皮筋

f 腹の諸筋、 大斜腹筋その 他

g 前肢の諸筋

h 肩の諸筋

i 膊の諸筋、 長前膊屈筋、 短前膊屈筋

k j 膊骨の後方に位する諸筋、 前膊の諸筋、 前腕前伸筋 側腕前伸筋 大前膊伸筋、 短前膊伸筋等 前趾骨伸筋、 側

趾骨伸筋、 前腕前屈筋 斜腕前屈筋 内腕前屈筋 表

1 後肢の諸筋、 広筋、 趾骨伸筋、 半建樣筋、半膜樣筋等 中臀筋、 深趾骨伸筋 表臀筋、 腸骨筋膜、

三頭股筋、

長

m 脛の諸筋 前趾骨伸筋、 側趾骨伸筋、 跗前骨屈筋、 孖

表趾骨屈筋、 深趾骨屈筋、 斜腕前屈筋

n 尻の諸筋 尾揚上筋、 尾抵下筋、 尾側傾筋

三 馬相学

序論 および六科 美格(「清眼堅蹄」 等) · 失格 · 変質 (脂肪瘤 骨瘤等)

本論

頭 と西洋風 部 舌溝、 頭形、 舌、 頭 頭の附根、 頂、 頰でエアゴ 頭毛、 腮、 頭の向きの良否、 類アトアゴ 額、 鼻梁、 断交、 鼻端、 耳 手綱の日本風 顳 唇、 顬 唇毛、 眼孟、

眼 鼻孔、 頤 頸、 鬣の種類および良否

> þ 体部 間 巻き\* 肋 背、 胸 | 脛、 尾、 肛門、 腹 縫際、 生殖機関等の種類と良否 会陰、 胸前、 腋、

> > 腋

c 四肢 前肢 肩 臑 臂 肘 膝、 管 腱、 球撃、 冠

羊毛、 蜘尻等の種類と良否

附図 亀谷了編。 から る。 [本ノートには毛筆で書き写した図が多数添付されてい 貞行は解剖図を石版刷りにして生徒に配ったとい (『目黒不動仁王尊の出来るまで-昭和三十六年。 青蛙房)、 それを写したものであ -後藤良回顧録 5

同人体の部

ろう。

骨格

頭の部 骨 顔面骨、上顎骨、鋤骨、 頭蓋骨、 前頭骨、 後頭骨、 額骨、 蝴蝶骨、 涙骨、 下顎骨、 顳顬骨、

歯

頭の運動、 屈曲、 回転と骨格との関係

欧米人・日本人・下等人種・猩々等の差異

頭角度、

b 躰幹の部 脊椎柱 (頸椎、 脊椎、 腰椎、 薦骨)、 肋骨、 胸

骨、 腕骨、 掌骨、 指骨 c

上肢の諸骨

胸端、

肩胛骨、

上臂骨、

下臂骨、

尺骨、

橈

骨盤等

腕の運動と骨格との関係

臂の運動と骨格との関係

d 下肢の諸骨 脛骨、 腓骨、 下肢の骨格の男女差、 足骨 (跗骨、 蹠骨、 大腿骨、 趾骨、 膝蓋骨、 種子骨 小腿

二、 筋肉

第5章 授業内容

帯 筋 概論 (種類と作用

頭 顴骨筋、 一前筋、 部 鼻翅上挙筋, 頭蓋頂、 耳後筋 三角頤筋、 上眼瞼挙筋、 前頭筋、 固有上唇挙筋、 方形頤筋、 後頭筋、 鼻縮圧筋、 黻 筋、 犬歯筋、 帽状腱膜、 顳顬筋、 鼻廻下掣筋、 小顴骨筋、大 <del></del>

劉骨筋、 耳上筋、 環 眼 口

b 躰幹の部 鋸筋、 筋 筋 筋 中斜角筋、 背長筋、 潤背筋, 外斜腹筋、 胸鎖乳嘴筋、 背棘筋 二腹頂筋、 小菱形筋、 直腹筋、 大胸筋、 頭夾板筋、 大菱形筋、 三稜筋、 小胸筋、 内斜腹筋、 頂夾板筋、 後上鋸筋、 鎖骨下筋、 内外肋間 後下鋸 肩胛举 前大

附図 ď c 上肢諸筋 肩胛諸筋 馬体の部と同様に図が添付されているが、 二頭膊筋、 三角筋、 棘状筋、 烏喙膊筋、 棘下筋、 内膊筋、 小円筋、 三頭膊筋 数は少ない。 肩胛下筋

森鷗外の「美学及び美術史」(美学と西洋美術史) 講義

西洋美術のみを講じた 美術史」 をいったん解かれ、 九年三月六日に至って再び嘱託として起用され、 以後同三十二年六月十四日、 鷗外の美学と西洋美術史講義に関する資料としては本 保 **、鷗外は前述のように明治二十八年七月に「美術解剖」** 講義を引き継いだ。 日清戦争で軍医の任務を果たしたあと、 (「美術解剖」は久米桂一郎に委ねられた)。 鷗外 ただし、鷗外は岡倉と異なり、美学と 小倉赴任の直前まで在任している。 岡倉の「美学及び 嘱託教師 義太郎 翌二十

> 刻科第一年のとき筆記したもの、 之一、近世巻之二」(富山県立美術館蔵)がある。 一卷之五」、「森鷗外氏講義、 年六月までの間の講義を筆記したものと考えられる。 西洋美術史、 つまり、 明治三十年九月から三十 上古巻、 これらは本保が 中古巻、 近世巻 彫

が、 じめの部分を除いてはほぼ同一である。 des Schoenen の大綱を編述したもの) と全体的に符合する。順序もは 鷗外、大村西崖同編『審美綱領』(Eduard von Hartman, Philosophie 美学ノートの内容は明治三十二年六月に春陽堂から発行され 参考のため、 下段に 『審美綱領』の内容目次を附記する。 その内容項目を次に掲げる た森

明治三十年度森鷗外美学講義內容項目

『審美綱領

序論

美学の紹介。 美学の語義。 美学沿革。 日本における

本論

美学用語の解説

官能 類 materialと芸術)、空想phantasia idea 観 generation と個物 individual objective、実際 reality と理 senses、主観 subjective と客 (実想・現実と理想・観念、

abstraction (具象concreteと抽象 (想と善悪・美不美)、 抽象作用

類

、想主義の弊害、

自然の写生、

(明治三十四年彫刻科卒) の筆記ノート

一森鷗外氏講義、

美学、

巻之

上 美の詮義

甲

美の現

一、美の現象 美の能変

変 (客観) (主観)、所

B 五官 美の現象

Ç 美の脱実

覊伴芸術 自由芸術

Ď

美の現象の異称

学科授業 483 第3節

仮象、 と迷illusion) 覊伴芸術 dependence、抽象作用 善・美、自由芸術 liberality と 於ける芸術品と自然物との差異、 用)、顕象 phenomenon(顕象に intuitus、直覚intuitive、 abstract、概念conception、観相 抽実、理想・実想と真・ 抽象作

> F G 真善美の差別

Ę

美の理想

H 美の現象の種別

官能と芸術との関係 観想と時間・節奏 rhythmus、運 空間と時間(相対と絶対、空間

動motion)、空想

芸術に於ける情 feeling 思議reflexion)、仮情と実情の実 想 anticipation、 動因motive、 情と内容 content、実情と仮情(予

応の情 sympathy と反応の情 concentration' 際に於ける相異、 情の二大別 縮摸または錬稠

すること

reaction)

三、審美上の楽受

一、官快 美の階級

具象階級

美の抽象より具象に及ぶ階級、

第

官快(快・不快)、第二算数

A、官快

二、美の感情 A、美なる感情

B、実情と仮情との交互 C、仮情を仮象中に投入 の関係

B、美の受用に於ける官 A、審美上の実なる楽受

中数 mean proportion、種類主義 と個物 (多形 polymorphismus)

と体格 construction)、第六種類 会開化の関係、体質 constitution 五生活(移置運動 locomotion、神 械学mecanics》、固形体·流動体· 動学 kinetics 《静学 statics·機 金截 sectio aurea)、第三運動(運 metry·比例 proportionality、黄 併行parallelism・対向均斉 sym-と単純 unity、形の正 equality・ nsity、形 formの重複 multiphicity 於ける代数 algebra と廣裏exte 別quontityと種別 quolity、量別に 機関《構成

organ (目的 purpose (能動actilabile·難動stabile))),第四機関 気蒸体、平位 equilibrium 《易動

様式style、粧飾 ornament)、第 construction · 作用 function》, ve·所動 passive))、

の節力・故意の節力、運動美と社 意 involuntary、姿勢 attitude、 経と中枢、随意 voluntaryと不随 .嬌態」grace or elegance、自然

三、動宜 D、数宜の解釈 C、比衡及線、面、 体

B、正、同及対

叀術 geometry 量別、點竄 algebra

B、固物、流物、 A、運動及力 氣物の

四、所動合志美 C、動宜の解釈

B、様式、装飾 D、聴感に属する所動合 C、所動合志美の解釈

A、所動合志

五、能動合志美(生機関)

A、能動合志美 C、能動合志美と下級諸

D、能動合志美の理想及 美との関係

第5章 授業内容

二、数宜

A、数宜

C、静形及動形の官快

ること

B、官快は無意識形美な

の弊、 個物と実相、自然に現われる理 の最も障碍なく完正に近きを撰択 turalismus、実相主義 realismus、 すべきこと、定型、自然主義 na 美術上の個物 芸術は自然界に於ける個物

> 六、類美 仮情

A、類美

C、中位 mean propor-B、 類の 多形 tion 及合想 ideal

A、個物美

典型、自然主義

C、個物の詮義 B、類及個物の理想

E、不二及典型 D、性格及相貌

F、個物美の解釈

丙、美の反面

美の反対

C、美の醜を容るること B、醜の連合 A、闕美、醜、 不足美

C、動不宜 B、数不宜 A、官不快

dation'

健康health》、第六種類

四機関、第五生活《服合accomo·

二、醜の階級

格 character、醜に於ける階級(第 第一不足美、第二闕美、第三醜、性

一官快、第二算数、第三運動、第

D、所動不合志

不服合、不健康

F、類醜 abnormity

伏《悲壮、崇高、滑稽》

意に於ける醜、醜と悪》、

式上の醜と精神上の醜、

智·情· 醜の折

過冗 excessivity》、第七個物《形

《非類 abnormity、闕損 defect、

遇、調譃wit、「戲讃」irony、「張 dignity)、葛藤を有するの美 級上より見たる崇高・優美、威義 失」caricature、「換型」travesty 其一無意識滑稽《聯想・性格・境 hable · 急拠性 · 閒気 delightfull comic (滑稽と背理・可笑 laug-悲哀 sorry、余哀 elegiac)、滑稽 sentimental、作気 pathetic、 の強弱、比較的と絶対的、 葛藤 conflict と無葛藤、 intrigue、動人affecting、 的葛藤、残忍 horrible、 会現象と葛藤、間逸idyllic、外観 (崇高と優美、分量の広袤と作用 具象階 無葛藤 多恨 詭謀

と情、滑稽と智》 manent 的》、有情滑稽 humore 超我 transcendent的と含蓄 im-的、悲壮 tragical、悲壮と欲 will、 劇 joke》 其二有意識滑稽(ゼント ルマン的とシニスマス cynismus 「換意」parody、風刺 satire、悪作 《動人・滑稽・悲壮の関係、悲壮

G

美の変化 modification

丁、美の変化 一、美の無葛藤の変化 H A、 強者及弱者の 美 量別、崇高、優美 個物醜 個物想醜の折伏

二、美の無葛藤の変化 B、崇高及優美の階級 低級、類、個物、威儀

A、 葛藤の世間解 動、多情多恨、作気、 低級の葛藤、間逸、外 権謀、長間気、感

B、葛藤の論理上の自滅 有情滑稽、 の配合、滑稽の麁細付 智、滑稽の三期、滑稽 憐愍の排斥、借 世界観とし

解及出世間解、 ての滑稽、 滑稽の世間 滑稽の

ricature、換形、換意、 陽贊 irony、做大 cacynismus、自由芸術 諷刺、悪作劇)、取笑 分類、調譃等(調譃、 学科授業 485 第3節

C、葛藤の出世間解 葛藤不解、 滅亡と其因

悲壮と感動と 評価、悲壮と善悪と、 出世間解、悲壮の

有情滑稽、有情滑稽の 葛藤の複解

一、美と実と

戊、美の世間位

美の世間に於ける地位

美と実生活との関係

(需用と美、

A、贅沢としての美

二、美と真と B、美の外護

の地位、美術の保護)、美と真と 美の独立、日本社会に於ける美術

B、自然美と芸術美と A、実真と想真

C、審美

利益なるものとは無関係であるこ

はなぜ必要か。審美学は実際上の の関係(実と真、美と真、審美学

製作と審美学

三、美と善と A、美と善と

矯)、宗教と美術との関係

(古代

の自然、裸体モデル、裸体と風 と)、美と善との関係(天欲、二つ

B、崇高及優美の善美 天欲、第二自然

立、分離の正当である理由)、義と に於ける相扶翼、今日に於ける独

(美術品の妙所は意 製作の原動

C、葛藤の善美

識の外に在ること、 意識との関係

一元論と多元論、

神論、

無意

四、美と信と D、善美の隔歴

A、芸術と信仰と

識哲学)

胚胎 conception、内作品の添削 独立後(製作の興 stimmung、

定按 fixation、分品 multifica-《布局》、

tion)

乙、芸術美の成立

C、開明史美

B、歴史美と芸術美と

A、歴史美と自然美と

一、製作の前級

A、摸倣

芸術の分類 suggestion) (想像 imaginationと自憑 auto-第三観察、第四趣味、 神来 inspiration 第五空想

(天) 不全芸術 incomplete、

羈伴芸術、 空間的と時間的(定音不成 (人) 自由芸術、 分類

美の存在

天美(天美と術美)、第二史美(天 美(史美)・芸術美(術美)、第一

三術美(様式と意匠) 史・開化史・文明史について)、第 美と史美、精神史・形体史・開明

製作の順序

初步 idealization、綜合combination)、 (摸做 imitation と想化 表顕 objectivation、

製作に必要なる種々の精神作用 第一感納perception、第二記憶、

地地

A、興会

二、製作

C、綜合 B、理想化

B、胚胎

Ę D C、練意 定案 表現

美の区別、自然美(天美)・歴史

C、真、信、

善

B、芸術品と信仰品と

下、美の処 甲、自然美及歷史美 実の相関

A、美の処別

一、自然美

B、自然美

C、自然美と芸術美との

D、自然美の分類

語、 と浮彫relief、彫塑に於ける色彩、 と彫刻 sculpture、全体物 statue るもの(イ)彫塑 plastics、彫剪 奏《軽技、 《舞踏》、空想的《演説》)、自由芸術 《建築、園芸、化粧》、両間的無節 (単自由芸術《官能・空間に属す 再現的》、 覊伴芸術(官能的・空間的 体操》、 定音高成言語)、 両間的有節 奏

不定音成言語《イ、製作品》

(1) 絵画、 素描と彩画、彩画の

表情唱歌、 〔イ〕器楽、(p)表情言語、(ハ) 官能・運動に属するも 劇、オペラ、空

踊り、

種類、

官能・時間に属するもの

劇の完全なる興行、 想に属するもの、 戯曲、 小説》、複自由芸術《黙 叙事詩、 劇の一種、バ 抒情

レー、

劇の完全なる興行、

オペラ

の完全なる興行》

三、機根 F

A、官能

Ç B、記憶 観察

Ę 空想

D

趣味

丙、芸術の分類 F, 神来

一、低級芸術

A、空間に係るもの

Ç 空時両間に係るもの

官能に係るもの

B、空想に係るもの ふもの、社交上の用を 智に愬ふもの、情に愬

自由芸術 官能に係るもの

空間静視象の芸術即ち

造形術(彫塑、純視象

В 羈伴芸術 時間に係るもの

に係るもの に係るもの、空時両間 空間に係るもの、時間

なすもの

分身

B、空想に係るもの 介、全表情芸術) 情唱歌)、表情芸術 純時間の芸術即ち音楽 の造形術即ち絵画)、 (器楽、 表情言語、 表

四、複芸術

合二芸術

詩、戯曲)、読体詩 吟体詩(抒情詩、叙事

官能と官能と、官能と

空想と

B、合三芸術 官能と官能と、 官能と

C、合四芸術

空想と

でき、生徒にも評判が良かったものと推測される。 膝栗毛、ゾラや小杉天外、泉鏡花あるいは自分の小説等々を例にと 政者に対する批判的意見なども吐露している。『審美綱領』と異な また、折りにふれて自らの美術、文学上の意見、 り、時には医学(解剖学)的知見なども加えて、丁寧に説いている。 あたり、生徒にわかり易いように絵画、彫刻等はもちろん、茶の 湯、数寄屋好みや利休好み、団十郎や権十郎、近松文学や東海道中 本保のノートによると、鷗外はハルトマン美学の大要を講ずるに 講義の方はわかり易く、しかも鷗外自身の考え方も知ることが あるいは時には為

第3節 学科授業

希臘時代以前(歴史前時代、埃及の美術)ギッシャ明治三十年度森鷗外西洋美術史講義内容項

f

希臘時代

との関係、Statue と Relief、彩色と純(単)色との関係、Statue と Relief、彩色と純(単)色

希臘彫刻の沿革

上古 ダイダロスの伝説、時代区分

**第一期** 

彫刻の特色、アゲラダスと弟子フィディアス・マイロン・ポ

リクレト「ゥス」

第二期

ポリクレト〔ゥス〕とカノン、ドリュフォロスカメネスとジュノー・ルドヴィシ、メロス・アフロディテ、チ術隆盛、ペリクレス時代、フィディアスとゼウス像、アル

第三期

ス(アッティカ派)とサティル像およびアフロディテ・クニド〔トス〕とイレーネ像、スコパスとニオベ像、プラクシテレ彫刻と抒情、大理石の多用、微細巧緻の趣味、ケフ ィソ ド

ス

第四期

価、題材の不適)、 ファルネーゼの牛、アポロ・ベルヴェデース、ヘリオスの大像、ラオコ ーン(作者、伝説、解剖学上の評 紫希臘特風の一変、人情の抽出、ロードス島の Chares、コロ no

彫刻以外の沿革

ペルガモン派のガリア軍人像

アペレスのアフロディテと歴山大帝肖像、Phyparography、natureでいた。 石 彫 刻、絵 画(画題の変遷、壁画の四技法、Fresco・貨幣、宝 石 彫 刻、絵 画(画題の変遷、壁画の四技法、Fresco・

式

morte'

陶器画)、

建築(Doros 式、Ion式、Attike 式、Korinthos

エトルリア時代

地域、人民、作品(灰盒、アラバスター、

時代概説、

羅馬彫刻の特

彫刻

羅馬時代

装像・武装像の衣服と着法、アキレス像、ファルネーゼのヘラージ、Jus imaginum)、文装像トガテーと武装像トラカテー、文旧套と新題目(Antinous)、肖像彫刻の起源(パトリッチとプリベ

の力士像、ダイアナ像、ニィル像、羅馬の三時代、浮彫、バックレス像、メディチのヴィナス、カリアティード、ボルゲーゼ

Nympha、サルコファージの浮彫、ポンペイ市の埋没

スとバッ

カナリア、

サティル像、

サイレーン像、

Famnus'

### 彫刻以外

vius' posita capital) タナグラの人形、 絵具の種類、 画題、 瓶類等、 ポンペイ出土品)、建築(迫持、 燭台、 装飾品、 絵画 (Laia ~) Pacu-穹窿、Com-

ビザンチューム時代

基督教初代の美術 石金銀細工 象徴する文字・諸形紋様、 基督教(基督、Paulus、ネロ帝、Petrus)、最古の基督像、Severus 基督教美術の勃興(コンスタンチヌス帝、カタコンベ、基督を 石棺、Dipticon、犠壺)、 東羅馬盛時の宝

ビザンチューム時代(ユスティニアヌス帝時代)

時代概説、 建築(バシリカ、内舟、外舟) ール大帝、ファールゼン宮殿、 ーノ、モザイクスの大流行、絵画の特色、中央欧羅巴への伝播、 (発達原因、カタコンベの壁画、一定せる基督像、マドンナとバンビ Niello、Filigran、カール大帝、 回々教の冷評とその影響、絵巻物)、 基督教 の絵 カ 画

#### 中古史

中古史区劃、 ランケン国の分立)、羅曼様式の風趣、オットー時代 歴史上の概見(日耳曼人の侵入、カール大帝の統一、

羅曼時代(八四三~一二〇〇)

witha、絵巻物、 ニ・チマブエ)、 七宝 Email の発達、ニコロ・ピサーノの彫 建築(バシリカ式の構造、 画風と着色法、 画題および壁画の描法、 羅曼バシリカ式 刻、 ジョヴァン 絵 画 (Ros-

チック時代(一二〇〇~一三七七)

Krabbe) 形迫持の構造、Pilaster、Pass と Schneuss、Consol と Baldachin ディ・マルティーノ、フラ・アンジェリコ)、 クの語源、 Point d'hanneur)、建築(ゴシック式建築の始源、 十字軍とその影響、フランケン人、武士気質 (Knight, Turnier フィレンツェ派のジョットー、オルカニア、シエナ派のシモーネ・ 硝子画、テンペラ画の板画、Minelied の巻物、 伊太利のジョットーおよびオルカーニャ、ピサーノ)、 剣形迫持)、 絵 画 (壁画の衰微と原因、 彫刻(Turnai 地方の彫 伊太利に於ける壁 職人組合、ゴシッ 画題、人身の割合 建築(剣

近世史

時代区分、Renaissance の語

# Renaissance 時代

リとカルヴィン、モリッツ・フォン・ザクセン、ロヨラとコンパニ イ 字版の発明、土耳古のコンスタンチノープル占領、伊太利に於ける 考 ケランジェロ、サヴォナローラと法王の対決、フラ・バルトロメオ、 ズの成立、英国の折衷的宗教、 古学、コロンブス、マルチン・ルターの事跡、新教成立、ツウィン グ レオ五世、クレメンス七世、ヴェニス、ミラノのスフォルツァ家、 の葛藤、サヴォナローラの説教、ナポリの内乱、サヴォナローラとミ 歴史上の概見(貿易、交通、宗教改革の動き、フスとサヴォナロ 独逸国の基礎、メディチ家と美術家たち、ロレンツォとパッツ ィ 宗教の動向と美術の関係

十五世紀の彫刻

ドナテルロ、ギベルティ、ルカ・デラ・ロビア、ベネデット レオナルド・ダ・ヴィンチ、アンドレア・カトゥッチ、 ・マイアーノ、アントニオ・ロッソリーニ、 ヴェ ロッ 489 第3節

リーニ、バッキオ・バンディネリミケランジェロ、ミケランジェロは、ベンヴェヌート・チェ

## 十五世紀の絵画

テー リベラトーレ・マリアニ、ピエトロ・ヴァンヌッツィ・デラ アントネロ・ダ・メッシーナ、ウンブリアの絵画、 サ 部 ンド ニ・サンチ・フランセスカ・ライボリー IJ ヴ ァサーリの美術史とその誤膠)、 フィレンツェに於ける源流、 ・ピエーヴ、ベルナルデーノ・デイ・ベットー、ジョヴァン ギ ・フランセスキ、 エロッキオ、ロレンツォ・ディ・クレディ、ピエロ・デグ ア・デル・カスターニョ、フラ・フィリッポ・リッピ、 マサッチオ、ファン・アイク、マソリーノ・ダ・パニカル、 ヴェネツィアの絵画、 フランセスコ・スクヮルツィオーネ、アンドレア・マン ニャ、メロッツォ・ダ・フォーリ、フランセスコ、コッ ルランダーヨ、アントニオ・パラジオロ、アンドレア・ ・ロ・ボッティチェリ、ベノッツォ・ゴッツォーリ、イル ルカ・シニョレリ、上伊太利パドヴァの バルトロメオ・ヴィヴァリーニ、 写生派開祖マサッチオ、アンド 般 の 画 風 (写生、 モデルの使 ニコロ・

## 十六世紀の絵画

品 I 伝、作品、 考古学の研究と写生の修養、 (レオナルドとの比較、 (ミケランジェロとの比較、 コレッジオ、フランセスコ・マツーラ、 画論、Sfumato の画法、 性格、 略伝、 絵画史上の位置、 作品、 門人等)、ミケランジェ オナルド・ダ・ヴ 作風、門人等)、 ジョルジ 略伝お ィンチ ・ラファ よび 才 作

ゼ、ティントレット ネ、ティツィアーノ、ベネツィアの二流作家、ヴェ ロネ ー

フランデレン〔フラマン派〕

ン・レイデン、ヒエロニマス・ボーセン(Bosch)、硝子絵とジス、ベルナルディン・ファン・オーレイ、ルーカス・ファザル・ワイデン、ハンス・メムリンク、クウィンテン・メッ明、ヤン・ゴッサールト・マビュース、ボジェル・ファン・隆盛の原因(商業、ブルゲント家)、ファン・アイクと油 絵 発

十五、六世紀独逸絵画

、壁懸

ュース・ベーハム、ルーカス・クラナッハルブレヒト・デューレル、ハンス・ホルバイン、バルトロミマルチン・ショーンガウエル、ハンス・ブルクマイヤー、ア

十六世紀仏蘭西絵画

十七、八世紀美術

フランソワ・クルー

工

ト、仏蘭西革命、ルソー、ナポレオンル、フリードリッヒ・デン・グロッセ、カタリナ女帝、カン概見(仏、独、瑞典、伊の国状)、Illumination、ヴォルテー

スケス、 の折衷派、 建築 ァン・ダイク、和蘭派 者ロレンツォ・ベルニーニ)、 (十七世紀バロック式と十八世紀ロココ式、バロック式の代表 ムリロ、 ロドヴィコ・カラッチ、グイド・レニ、 仏蘭派 ルソー、 《和蘭》のフランツ・ハルス、レンブラン 《白耳義》のルーベンスとアントニス・フ ナポレオン 建築と彫刻の一致、 西班牙のヴェラ 絵画 (伊太利

ローラン、 ポール・ポッター 吉利のホーガース》、 ボ 1 英吉利のレイノルズおよびアカデミー 風俗画専門家 和蘭のロイスダール、 Щ 水専門画家 《和蘭のブリューゲル、 ホッベマ) 《仏蘭西のプーサン、 派 動物専門画家 仏蘭西のワトー、 トーマス・ゲインズ 《和蘭

## 十九世紀美術

彫刻 絵画 モーラン、ランドセール、 スターブル、 ブ・クー ズ、 ル・ルソー、 (カノーヴァ、 ラスキンとプレ・ラファエリズム)、 (古則派《院画》と写生派、 ルべ、 ラスキンの画論、 コロー、 エドワルド・マ トルヴァルセン、モンテヴェルデ) ジャン・フランソワ・ミレー、ギュスタ ロセッティとプレ・ラファエル・ブラザ ウィリアム・ターナー、 仏蘭西のルイ・フランソワ、 ネと印象派、 建築(鉄材の使用等)、 英吉利のジ ジ E ョージ・ ン・コン テオド

違いない。 作例が掲げられていない場合が多々あることである。 れるのは、 重複を避けるため、 に注目されるのは、 く鷗外の作品解説が物理的に筆記ができないようなかたちで行なわ いることである。 本保が一度も欠席せず、 ギリシャ時代に於けるパルテノン神殿の如く、 た参考書から判断すれば、 にも拘らず本保のノートに筆記されていないのは、 講義は全体的に淡々とした調子で進められた 感が この点は鷗外が久米桂一郎の西洋考古学講義との 敢えて簡略化したと解釈される。 ギリシャ以前の古代美術の講述が簡略化されて 忠実に講義を筆記したと仮定して、 鷗外は多くの図版を生徒に見せたに 当然掲げるべき 第二に注目さ 後述の鷗外が あ 第

> 有翼式、 び波斯、 時代、 法、 ラオコオン時代》、 第三期 B.C. 433~323 プラクシテレエス時代、 480 ペイシストラトス時代、 亜細亜諸国(民族興亡)、フョニチャ・希伯來・リヂヤ、 ら第二十一号 史」が大村西崖編『美術評論』 りにそれらをXとすれば、 術上の主義の相異は講義の内容にも現われているように思われる。 どの問題を重視し、 洋美術の流れを説くにあたって東洋との関係や美術に於ける精神な の場合は客観的ないしは直訳的に講じていることである。 れたためであろう。 が四期の遺迹)、 無名氏」とあり、 鷗外の講義は数種類の洋書が底本となっているようである。 彫塑材体の変遷、 銅器時代、 希臘 ドロス式・イオン式及びアッチケ式・コリントス式 (同三十二年九月十三日)まで連載されている。 (民族と地理、 希臘の彫塑及び絵 鉄器時代》) 希臘芸術前紀 内容は芸術の萠芽 第三に注目すべきことは、 解釈としての美術史を講じたのに対して、 第一・二期の彫塑》)を説いて中断している。 Xの大要の翻訳とみられる「西洋美 第二期 B. C. 480~433ペリクレス時代、 希臘美術時代区分 に始まり、巴比侖及び亜西里亜、 の創刊号 (史徴前)、 画 《彫塑隆盛の原因、 (墳墓遺跡、 (明治三十年十一月五日) 希臘の建築 第四期 B.C. 323~146 前任の岡倉覚三が 《第一期B. C. 1104~ 器什遺物 メチ 《無翼式と 両者 筆者は ヤ 及 か 小 美 西

0

刻の後に

本保ノートとを対照すると、後者は前者の古代(ギリシャ以

ギリシャ時代については前者とは逆に建築を彫

前者に無い

挿図が多く掲載されており、

作品

解説は詳細に亙っている。

美術史」に付随して別稿して簡単に説き、前者

「希臘諸神伝」が連載されている。)の項を付け

加

「希臘諸神伝」(『美術評論』には

分を省き、

氏は鷗外であったと推定できるのであるが、この推定にはもう一つ 所もある。従って、このことから逆に、 の有力な根拠がある。 えているが、全体的にみて前者に基づくものであることがわかる。 文体はよく似ており、ほとんど同一の文章が記されている箇 従来不明とされてきた無名

五十年一月) 鷗外の「明治三十一年日記」(岩波版『鷗外全集』第三十五巻。 には次のような注目すべき記述がある。 昭和

七月三十一日 七月二十日「大村來る。西洋美術史の稿を継ぐ。」 二月二十四日「大村の史稿を閲す。」 二月十九日「大村のために西洋美術史を講ず。」 一月十五日「大村西崖、 :史を講ず。夜半に至りて辞し去る。」 「泰西美術史を校す。」 白井雨山来り訪ふ。 西崖と與に西洋美

れていない。とすれば、 は大村西崖編『希臘羅馬諸神伝』として刊行)、「西洋美術史」は刊行さ に鷗外と他者の共編による単行本として刊行されるが 画手引草」、「希臘諸神伝」、「芸用 解 剖 学」(以上は『美術評論』に連 史」を刊行しようとしていたことがわかる。 これによって彼が大村西崖とともに何らかのかたちで「西洋美術 連載のそれ以外には考えられないのである。 「審美綱領」等の執筆に関する記述もあり、それらは孰れも後 日記に登場する「西洋美術史」は この日記には外に かくて、 (「希臘諸神伝」 無名氏と 『美術評 . 「洋

> めであろう。 たのは鷗外が小倉に赴任し、 は鷗外あるいは鷗外と西崖であったと推定される。 西崖も 『美術評論』から手を引いたた 連載が中断され

# 黒川真頼の「歴史」講義

る。 た日本史を講じた。関連資料として左記の講義筆記が現存して 黒川真頼は開校当初から「歴史」講義を担当し、美術を中心とし

術 闢と美醜の観念の発生、 これは第一回入学生小島光真の筆記ノート「明治二十二年二月 ①「大日本美術歴史筆記、文学博士黒川真頼先生口授 備忘録」中に含まれているもので、 (記紀等文献に基づく) を中心とした歴史である。 神代、 天孫降臨より斉明天皇までの美 内容は美の字義、

②『歴史講義筆記』一冊

九月十一日

「西洋美術史を校し、……」

藤直種(同上)ら職員が筆記したもの。 これは明治二十二年に田口騏次郎 一とほぼ同一であるが、こちらは継体天皇の代で終っている。 至仁明天皇」 一冊 (巻末の職員任免表を参照)、 本学附属図書館蔵。内容は 加

3

一日本歴史

菅紀

一郎が普通科第一年または第二年のとき、

分に関する筆記の断片も残っている。 歴史」二冊

二年度または二十三年度に筆記したもの。

仁明天皇以降の部

即ち明治二十

原安民が普通科第二年 のとき (明治二十四年九月~同二十五年七